

平成 28 年度 (2016 年度)

重要文化財指定検討資料

有形文化財 (彫刻) 木造 地蔵菩薩坐像 1 躯

有形文化財 (考古資料) かろうと山古墳出土品 75 点

横須賀市教育委員会

例 言

- 1 本報告は、教育委員会教育長から平成29年1月13日付けで諮問のあった「平成28年度の指定重要文化財等の新指定」についての答申のための指定候補文化財の詳細調査報告である。

目 次

- 1 有形文化財（彫刻）
木造 地蔵菩薩坐像 1
調査者 文化財専門審議会 瀬谷貴之
- 2 有形文化財（考古資料）
かろうと山古墳出土品 5
調査者 横須賀市教育委員会博物館運営課 稲村繁

有形文化財(彫刻)

もく ぞう じ ぞう ぼ さつ ざ ぞう

木造地藏菩薩坐像 一躯

瀬谷 貴之

(横須賀市文化財専門審議会委員)

所在地 横須賀市大矢部5丁目49番(地番)
所有者 宗教法人 清雲寺 代表役員 武久宗靖
所有者住所 横須賀市大矢部5丁目9番15号

1 はじめに

清雲寺は、後三年の役(永保三年〔1083〕)で活躍したことが知られ、三浦氏二代とされる三浦為継の菩提寺という。衣笠城近くにあつて、三浦一族の廟所的な圓通寺や、三浦義明の菩提寺とされる満昌寺などととも、早くから三浦氏により寺院として整備されたとみられる。もと天台宗であつたが、応永年中に大雅清音により、圓通寺とともに臨済宗円覚寺派に改められたという。同寺にはその由緒を示す、鎌倉時代初期の慶派仏師による毘沙門天立像(旧本尊、県指定重要文化財)や、旧圓通寺本尊で宋より請来された観音菩薩坐像(現本尊「瀧見観音」、国指定重要文化財)などが伝来する。また境内には、為継の墓とされる五輪塔や、圓通寺から移された多数の三浦一族のものとされる五輪塔や板碑なども安置されている。

2 形状・品質構造

その形状は、円頂として、頭髪部の髪際に僅かに段差をあらわす。額に白毫相、首に三道相を示す。着衣は、大衣、覆肩衣、裙を着ける。大衣は左肩に懸かり、背面を覆って右肩に浅く懸って右腋下を通過して前面に大きくまわり、結跏趺坐した右脚を覆って前面に一部垂下する。大衣はさらに左肩に懸かり、折り返し部で肩先を覆う。また大衣の左腕及び手首まで懸った部分は左袖部分を形成する。覆肩衣は右肩を覆い、右手首まで懸かって右袖部分を形成し、左袖と左右均等に大きく垂下させる。裙は腹前にその上端をあらわし、いわゆる「腹帯」となる。裙は右前に打ち合わせ、大衣の下から見える部分は、前面に垂れて台座を覆う。左手には宝珠、右手には錫杖を執っていたとみられるが現状、両手首先を欠失して不明。

品質・法量は以下のとおり。

品質 : 木造、金泥塗り、漆箔、玉眼

法量(単位:cm)

全高(台座・光背を含む)	67.6				
(本体)像高	21.2	髪際高	19.8		
頂一顎	7.4	面長	5.5	面幅	5.1
耳張	5.9	面奥	5.1		

	胸 奥	6.3 (右)	腹 奥	7.0	膝 奥	14.0
	坐 奥	18.6	肘 張	14.5	脇下張	7.8
	膝 張	16.5	袖裾張	21.1		
〈台座〉	総 高	33.6	最大張	29.8	最大奥	27.4
〈光背〉	総 高	34.0 (現状)				
	頭光径	11.0	身光高	16.6	身光張	18.4

構造は頭体幹部を前後二材で矧ぎ、割首のうえ、内割りを施す。左側に袖半ばまでを含む一材、右側に肩先を含む一材を、それぞれ矧ぐ。両脚部は横木一材製とする。台座から垂下する左右袖先、及び前面に垂れる裾にそれぞれ別材を矧ぎ付ける。表面の仕上げは、矧目に一部布貼りを施し、錆下地、黒漆塗りとして、肉身部は金泥塗りを施し、衣部分は漆箔仕上げとするか。頭髮部には青系の群青または緑青を施すとみられるが現状不明。全体に濃い灰白色の古色を呈す。

。保存状態について本体部は、両手首先と、全面に垂下する裾の右前先を一部欠失する他は概ね良好。台座・光背は江戸時代中後期頃の後補である。

3 作風・制作時期について

本像の造立年代は南北朝時代まで遡るもので、清雲寺及び衣笠城や三浦氏の歴史を考えるうえで、重要な遺品の一つと言えよう。ただし、その詳しい伝来については残念ながら不明とされる。前述のように清雲寺には、瀧見観音像や多くの五輪塔や板碑などが、三浦氏の墓所・廟所であった圓通寺から移座されていることは留意されよう。地蔵菩薩像が中世鎌倉地方において、亡者の地獄からの救済を目的として、武士階級により数多く造立されたことを考慮すれば、本像も円通寺周辺から移座されたとするのも一案である。

本像が中世彫刻の遺例と注目される理由として、その大衣の左右袖や、裾先を大きく台座から円弧を描くように垂らす形式、すなわち「法衣垂下式」の形式を採ることがあげられる。法衣垂下式の像は、鎌倉時代後期から鎌倉地方を中心に分布するもので、その形式は大陸から請来された仏画を移しとったものとされる。著名な作例としては、銘文から永徳四年（1383）に宅磨法眼浄宏が製作したことが知られる来迎寺地蔵菩薩坐像（旧報恩寺本尊、神奈川県指定文化財）が挙げられ、鎌倉時代の浄光明寺阿弥陀如来坐像（正安元年〔1299〕）や常楽寺文殊菩薩坐像など古い作例も挙げられる。また千葉県山武市の宝聚寺釈迦如来坐像（南北朝時代）をはじめとして、房総地方にも一部作例が分布する。

いずれにせよ法衣垂下式は、一方の脚を台座上から下してくつろぐ姿の「遊戯坐」（ゆうげざ、代表例：東慶寺観音菩薩坐像〔水月観音〕）や、仏像の表面に文様を型取りしたものを張り付け立体感を出す仕上げ「土紋」（どもん、代表例：浄光明寺阿弥陀如来坐像、来迎寺如意輪観音坐像）などと共に、大陸の影響を色濃く受けながら、鎌倉地方独自に発達した仏像の様式、技法である。法衣垂下式の形式を採用し、小像ながら南北朝時代の鎌倉仏師の堅実な作風を見せる本像は、宋から直接請来された観音菩薩坐像（瀧見観音）が安置される清雲寺に伝来したと合わせて、三浦半島や鎌倉地方の仏教文化を考えるうえで参考となるだろう。



木造地藏菩薩坐像



右側面



背面



左側面



底面

木造地藏菩薩坐像

かろうと山古墳出土品

稲村 繁

（横須賀市教育委員会博物館運営課）

所在地 横須賀市深田台 95 番

所有者 横須賀市

点数 75 点

1 かろうと山古墳出土品の概要

本資料は、平成 19 年度に横須賀市の史跡指定を受けた、横須賀市光の丘 2568 番地に所在するかろうと山古墳からの出土品である。幾たびかの盗掘を受けたのち、昭和 27 (1952) 年に実施された赤星直忠による発掘調査 (第 1 次調査) によって、埋葬施設である箱式石棺内より金銅製品を含む武器類が検出された。昭和 58 (1983) 年の横須賀市自然・人文博物館による墳丘測量と箱式石棺の実測調査 (第 2 次調査)、平成 2 (1990) 年の横須賀リサーチパーク調査団による墳丘の範囲確認調査 (第 3 次調査) ではともに遺物は検出されなかった。その後、「新横須賀市史」の編纂事業にともない正確な墳形・規模および築造時期を示す遺物の検出を目的とした平成 16 (2004) 年の市史編さん考古資料調査会と横須賀市自然・人文博物館との共同調査 (第 4 次調査) によって、墳丘南側裾部より土器類が検出された。したがって、今回対象となる資料は、第 1 次・第 4 次調査により検出された遺物群である。

資料の概要

第 1 次調査 (石棺内) 出土遺物		第 4 次調査 (墳丘南側裾) 出土遺物	
直刀片	13	鉄鏃片	1
鉄鏃片	19	須恵器大甕片	18
鉄製刀装具 (鉋) 片	1	須恵器ハソウ片 (瓦泉)	1
金銅製責金具片	1		
金銅製柄巻片	13		
金銅製蟹目釘片	3		
銀製花卉飾付金銅製弓弭 (末弭)	1		
銀製花卉飾付金銅製弓弭 (本弭)	1		
金銅製弓弭残欠 (末弭)	1		
金銅装鑿状鉄製品	1		
銅薄板小片	1		

第 1 次調査で石棺内より検出された遺物は、度重なる盗掘によってそのほとんどは原位置が特定されず、さらに断片となって棺内各所に散在していたことから、全形をうかがえる資料はない。そのようななかで、直刀は茎・関・刀身各部の破片であるが、身幅に大小の差が認められることから、2 振以上と推定される。また、鉄鏃は鏃身部や茎部の遺存状況などから、9 本以上が副葬されていたと考えられる。第 1 次調査の

報告では刀子の出土が伝えられているが、現在刀子は確認できない。ただし、金銅製責金具が小形であることから、刀子にともなう可能性が考えられる。金銅製柄巻は盗掘によって大半が失われたらしく、遺存量が極めて少ない。また、金銅製蟹目釘が3本あることから、2振以上の装飾大刀が副葬されていたものと思われる。ただし、金銅製柄巻と蟹目釘のみの遺存であることから、どのような装飾であったかは不明である。

弓弭は、末弭2・本弭1であることから、2張以上の弓が副葬されていたと考えられる。このなかで、ともに銀製花卉飾をもつ金銅製末弭と本弭があることから、これらが対になるものと思われる。ただし、銀製花卉飾付金銅製末弭については、第1次調査の報告時には遺存し凶化もされていた銀製花卉飾部と挿入されていた木質の大半が現状では失われている。

金銅装鑿状鉄製品は全体に錆化著しく、鑿部の約半分を欠損している。そのため、保存修理時に左右対称の形状に復原してある。鑿状の先端部に明確な刃部は確認できない。本体は銚と同様に袋状を呈し、木製柄を差し込んでいるが、現在木質はほとんど遺存していない。差し込み部となる口金部分には金銅製の花卉形飾がみられる。

第1次調査の報告では矩形と三角形2枚の銅薄板小片が出土したとされるが、現在は三角形の1枚のみが遺存している。1mmに達する厚さであることや、わずかに湾曲することなどから、銅鏡の破片である可能性が高い。

第4次調査で墳丘南側裾部より検出された須恵器群は大甕とはそうであるが、いずれも小破片の状態であり、ほとんど接合していない。静岡県湖西窯産の須恵器と考えられるが、ハソウ(瓦泉)は口縁部の一部のみで、大甕は一個体の可能性が高いものの出土量は全体の約一割にも満たない。出土状況などから、葬送祭祀の過程で破碎し蒔かれたものと考えられる。

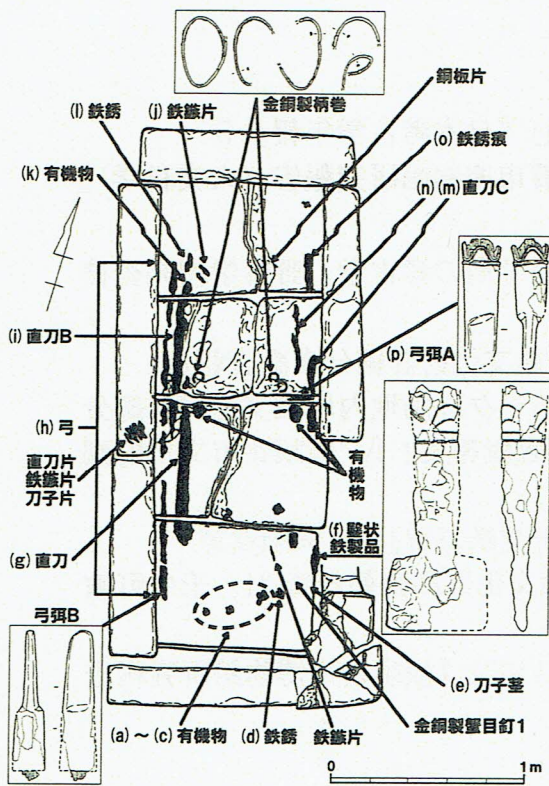
まとめ

古墳群を形成せず丘陵地帯のなかに単独で築造されていることや、周辺に類例のない切石組合せ箱式石棺を埋葬施設とするなど、特異な様相を呈する古墳である。また、出土した須恵器などから7世紀中葉頃の築造と考えられるが、この時期三浦半島では古墳の築造は衰退し、横穴墓が爆発的に盛行している。したがって、かろうと山古墳は三浦半島で最後に築造された古墳である可能性が極めて高いことになる。

度重なる盗掘を受けたとされるが、棺内に残されていた遺物からは装飾大刀を含む多数の金銅製品が副葬されていたことが判明しており、被葬者は極めて有力な首長であったことがわかる。副葬品のなかで特に注目されるのが金銅装鑿状鉄製品である。現在までのところ鑿(斧)状鉄製品は全国で14例確認されているが、金銅製の装飾を有するのは本墳出土例のみである。ほとんどが6世紀末葉～7世紀中葉頃の墳墓から出土しており、その大半は西日本に分布している。また、農工具あるいは儀仗との見解とともに、渡来系集団との関係が指摘されている。これらを考えあわせると、本資料は7世紀前半代において西日本さらには渡来系集団と密接な関係にあった有力首長が三浦半島最後の古墳の被葬者であった可能性をしめしている。

参考文献

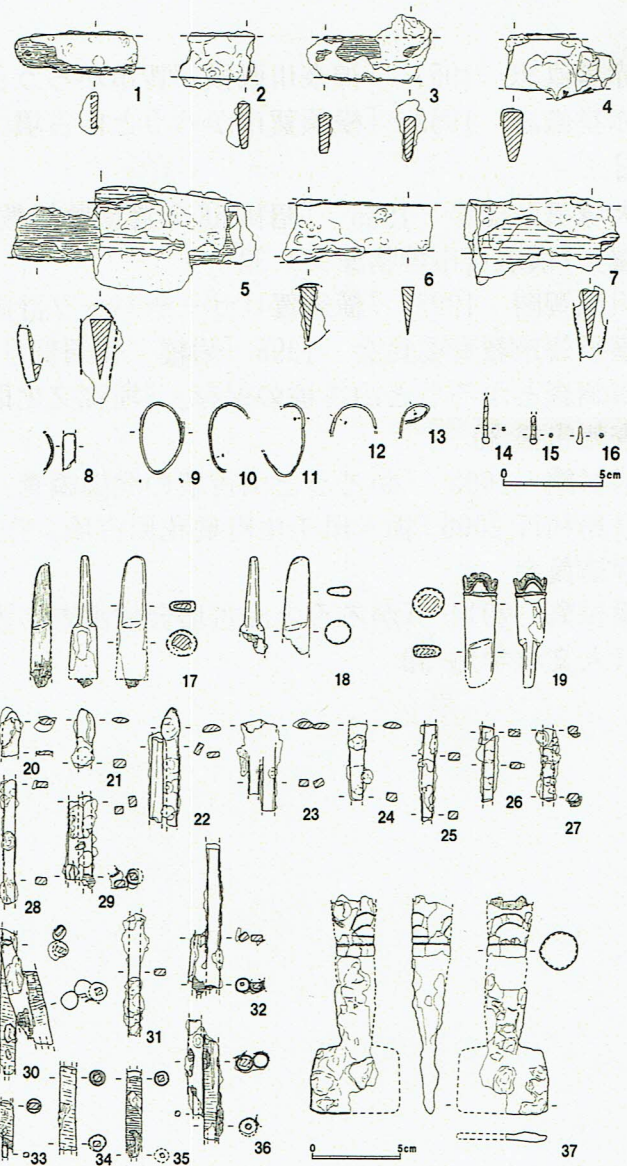
- 赤星直忠 1957 「神奈川県横須賀市かろうと山古墳」『日本考古学年報』5
- 赤星直忠 1958 「横須賀市かろうと山古墳」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』
2
- 大塚眞弘ほか 1985 「昭和 58 年度博物館教室「三浦半島の考古学」野外学習調査概報」『横須賀市博物館報』32
- 川瀬智晴 1992 『横須賀リサーチパーク計画地内埋蔵文化財詳細分布調査報告』
- 横須賀市教育委員会 1996 「附編 横須賀リサーチパーク計画地内埋蔵文化財詳細分布調査とかろうと山古墳の保存」『埋蔵文化財発掘調査概報集』IV 横須賀市文化財調査報告書 30
- 稲村繁 2005 「かろうと山古墳の発掘調査」『市史研究横須賀』4 横須賀市
- 君島利行 2006 『栃木県壬生町桃花原古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書 21 壬生町教育委員会
- 稲村繁 2014 「かろうと山古墳発掘調査の模型について」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』59



石棺内遺物出土狀況



金銅製弓弭(左)・金銅裝鏝狀鐵製品(右)



石棺内出土遺物(第1次調査)

墳丘南側裾部出土遺物(第4次調査)

